



TITLE:

隋末の内亂と民衆：剽掠と自衛

AUTHOR(S):

谷川, 道雄

CITATION:

谷川, 道雄. 隋末の内亂と民衆：剽掠と自衛. 東洋史研究 1995, 53(4): 657-683

ISSUE DATE:

1995-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154508>

RIGHT:

隋末の内亂と民衆

——剽掠と自衛——

谷 川 道 雄

- 一 序 言
- 二 隋末の官界と地方社會
- 三 剽掠と自衛
- 四 州縣秩序の再建
- 五 結 語

一 序 言

唐の太宗が即位すると、太宗はかねてから良吏として評判の高い景城都督府（現河北省獻縣）の錄事參軍張玄素を召して、政治の道について下問した。周知のとおり、太宗は隋末内亂後の情勢の下で唐朝の政治をどう進めてゆくべきかに深い關心を抱き、臣下たちの意見に耳を傾けることに努めた。張玄素を召したのも、そのためであつたであらう。このとき玄素はその奏對の中でつぎのように述べている。

臣又觀隋末沸騰、被於宇縣、所爭天下者、不過十數人、餘皆保邑全身、思歸有道、是知人欲背主爲亂者鮮矣、但人君不能安之、遂致於亂、云々。

と。群雄蜂起した隋末の内亂でも、天下を争った者はほんの十數人で、他はみな地域を守り生命をながらえて、道義ある勢力に歸屬したいと考えたのであって、そこから見るとことさらに人主に叛いて亂を起そうとした者は極めて少かった、というのである。ふつうに隋末の亂といえは、「中原逐鹿、投筆事戎軒」（魏徵「述懷」）というような中原逐鹿のイメージがあるだけに、この張玄素の發言は、どこか意外な感じを抱かせる。後文でも述べるように、隋末内亂に關する從來の研究もまた、多くは天下を争う所の勢力に焦點が合わされてきた。しかし、張玄素の視座はそれと異なり、ひたすら自分の保全をねがい、皇帝に弓を引くというようなことなど全く考えたこともない、絶對多數の民衆の上に照準が合わされている。こうした民衆を安んずることこそが政治の根本だというわけである。

張玄素とは、一體どのような人物であろうか。その傳記は、『舊唐書』卷七五および『新唐書』卷一〇三に載せる。以下兩傳によってその概略を述べると、もと蒲州・虞鄉（山西省虞鄉縣）の人、隋末に河間郡景城縣の戸曹をつとめたが、竇建德に景城を攻陥され、擒われて殺されそうになった。しかし縣民千餘人が泣いて助命を乞うたので、建德はかれを赦し、治書侍御史に任命した。玄素はこれを固辭したが、煬帝が弑されたのち始めて竇建德に仕え、黃門侍郎を授けられた。唐が竇建德を亡ぼすと、景城都督府錄事參軍に任命された。太宗に召されたのは、この錄事參軍時代のことである。太宗は玄素の奏對を嘉して侍御史に拔擢し、以後、給事中・太子少詹事・太子右庶子と累遷している。直言を憚らないかれは、太宗の洛陽乾陽殿造營に反對して、陛下の過失は煬帝よりも甚しいと極諫している。東宮官となつてからも、しばしば皇太子承乾の非行を諫めたが、聽かれるべくもなかった。承乾が廢されたのち、潮州・鄱州など邊境の刺史をつとめ、高宗朝に歿した。

以上が張玄素の傳記の大略であるが、さらに次のようなエピソードがある。

張玄素はあるとき朝廷で太宗に官歴を訊かれてひどく恥かしい思いをした。これを見ていた褚遂良が早速上疏する。「陛下は昨日、玄素に隋では何の官であつたかと問われました。玄素が縣尉でございましたと答えると、また問われまし

た。縣尉になる前は何だったのかと。玄素が流外でございましたと答えると、さらに、何の係だったのかと訊かれまして。玄素が出任するとき、足はよろめき、顔色は死灰のようで、みんな驚いておりました。唐朝は創業以來、どんな卑賤な者でも才能によって登用する原則であります。陛下は玄素を三品にまで拔擢しておきながら、羣臣の前であのように恥をかかせて宜しいものでしょうか」と。褚遂良に言われて、太宗も自分の過ちを認めるのであるが、右の張玄素の最初の答えに縣尉とあるのは、景城縣戸曹のことであらう。そして、それ以前には流外であり、具體的には、令史であつた。⁽²⁾

要するに、門閥尊重の氣風がまだ強く残っていた當時にあつて、張玄素は、令史という卑賤な身分から立身した人である。かれはそのことを公然と聞かれることを恥ぢてはいるけれども、しかし地方行政の實際を擔當する者として誠實に任務を盡し、地方民衆の心を深くとらえてきたのであつた。寶建德が玄素を殺そうとした時、縣民たちは身代りになりたいと申し出たくらいである。唐朝に仕えて榮進したのちもその正直篤實の姿勢を改めず、晩年は不遇に終つた。そこには成り上り者の驕つたすがたは全く見られない。

張玄素の生涯と人となりについてやや詳しく紹介したが、かれの内亂に對する見方が、このような經歷や人格と無關係ではないことを示したかったのである。かれの見つめる所は、民衆そのものにある。始めから亂を起そうなどとは夢にも考えたことのない民衆、そうしたかれらが、生活の安定と生命の持續をねがい、その願望の延長として良き政治の世界を求めたのだという。これは、かれが地方の官吏として民衆と共にあつた體驗によって生れた觀點ではなからうか。

ひるがえつて、この時期の内亂に關する近代の研究は、すでにおびただしい量に上る。そして、その觀點もそれぞれに異なるのであるが、その多くは、天下を爭つた叛亂指導者たちに焦點が定められてはいなかったであらうか。つまり、隋王朝とこれにとって代ろうとする新たな政治勢力との對抗の構圖において、この内亂をとらえてきたものではなかったか。そして、この構圖を前提として、叛亂指導者たちの階級的位置、すなわち官僚貴族であつたか、地方豪族であつたか、或いは民衆出身者であつたかが論ぜられてきたようにおもわれる。民衆出身者によって叛亂が指導されるとき、これを農民

起義という言葉で表現することも少なからずある。起義というまでもなく、無道の權力政治に對する正義の行動であつて、そこには一定の價值觀念が含まれている。そして、この正義の戦いは當然發展して人民政權の樹立に至るべきであるが、官僚・豪族地主の内外からする反撃と、農民自身の視野の狭さなどから實現を見ず、ついに舊官僚出身の唐朝による天下統一に結果する。しかし、敗北した民衆の力量は、何らかの形で新王朝に影響しているはずであり、とすればそれは何であろうか。およそこうした議論が、從來の隋末内亂研究をめぐつて展開されてきたようにおもわれる。

從來の研究にはさまざまの異なる立場があつて、とても一概に總括できるものではないが、しかしそれにしても、舊權力對新權力という枠組みが、共通して前提にあることは否定できないであらう。とすれば、そこから民衆のありのままのすがたは、抜け落ちてゆくのではなからうか。いくら内亂における民衆の行動を政治的に正當化してみても、それは、現代政治の立場から、いわば外側から附與された價值であつて、眞に民衆の本質をとらえ得たとはいえないのである。⁽³⁾

張玄素の見方は、それらとは決定的に異なっている。かれによれば、絶對多數の民衆は、非政治的存在である。内亂は、その非政治的民衆の生きんとする欲求の結果であり、また内亂の道程においても、政治的野心とは無縁であつた、といふのである。もし私たちが、この張玄素の視點に沿つて内亂をたどつてゆくとすれば、そこにいかなる社會像が立ち現われるであらうか。本稿はこうした關心の産物である。なお本稿で取り上げた舞臺は、主として山東（現今の河北・河南・山東三省）に限定したことを、あらかじめ斷つておきたい。

二 隋末の官界と地方社會

煬帝の常軌を逸した奢侈生活、土木事業、對外擴張などが、内亂の主たる原因であつたことは、言うまでもないであらう。それらの要求する人的物的負擔は、地方民衆の生活を壓迫し破壊するものとなつて行つた。中央政治がこれほど直接的に、しかも全國的に、地方民衆の生活に影響を與えた例は、過去數百年間の魏晉南北朝時代には、恐らく見られないの

ではないか。魏晉南北朝時代は、たとい中央に暴君が現われても、貴族出身の朝臣があつて極力これを阻止し、地方には豪族勢力があつて地方政府との間を調整して、できるだけ被害を少くしていたようにおもわれる。しかし隋朝が天下を統一すると、上には獨裁君主が出現し、下には豪族層の地方政權干與を抑えて、中央と地方の間には中央集權體制が徹底することになった。かの文帝開皇十五年の鄉官廢止がそのための措置であつたことはいうまでもない。こうして、煬帝の虐政も、民衆の生活に直接的影響を及ぼすことになったのである。

しかしながら、限度を越えた君主の意志が地方へ貫徹してゆくためには、制度としての中央集權體制が存在しているだけでは不十分なのであつて、他方で、これを遂行する官僚群の絕對服從が必須となる。周知の如く、煬帝の側近には、宇文述・虞世基・裴蘊・裴矩・蘇威のいわゆる五貴があつて、帝の意志に阿諛追順し、さらに、その意を迎えてこれを助長しさえした。關隴系武人の出身である宇文述はいわば帝の親信、虞と兩裴はいずれも名族の出身であるが南朝もしくは北齊の亡國の臣から隋に入つたもの、蘇威は西魏の名臣蘇綽の子で隋文帝の重臣であつたが、煬帝が彼を側近に置いたのは、その名望を利用したのである。こうしてみると、五貴とは、南北朝後期の各國の官僚群をそれぞれ代表しているごとくであるが、しかしもはや彼らにその代表性はない。彼らに具わる才幹は、すべて煬帝の意志に奉仕するために發揮されたのであつて、民に責任を負う士大夫としての自立性をそこに見ることはできない。

この煬帝—五貴體制のもと、内外の臣僚たちも、煬帝への絕對服從を強いられる。もし幾らかでも批判的な言辭を吐き、或いは不羈獨立の姿勢を崩さない者は、帝の忌諱に觸れ、五貴に告發されて、疎外・刑罰の悲運に見舞われる。かくして臣僚たちは爲政者としての良心を捨て、大勢に合わせた生き方を選ぶようになった。その轉向の風潮を、史書は「變節」というような語で言い表わしている。⁽⁴⁾

煬帝の位置から遠く離れた地方官僚の上にも、こうした空氣が重くのしかかり、彼らもまた戦々競々たる情況にあつた。その直接的原因に、土木工事などの他に、煬帝がたえず地方巡幸に出たことがある。時に后妃百官を従えたその豪侈

な行幸には、莫大な物資の供給、いわゆる供頓を必要とする。それが煬帝を満足させるかどうか、徑路に當った地方官の運命を大きく左右した。もし満足が得られれば榮達の機會となるが、そうでなければ、⁽⁵⁾ 刑罰に陥ることさえあった。

獨裁權力は、それに奉仕する官僚間におのずから深い競合關係や龜裂を生むものであるが、煬帝期の官界には、⁽⁶⁾ 何とも

言えない重苦しい空氣があったようであり、それは地方官廳の中でも例外ではなかった。一例を挙げると、齊郡（山東省）太守元褒と、同郡の西曹掾との間に起った陰慘な事件がそれである。高句麗戰爭が始まると、齊郡も重い軍事的負擔にさらされることになった。郡の官吏はつぎつぎにそのための督責に赴いたが、西曹掾が出かける番になって、病氣と詐わった。元褒がこれを問い詰めてゆくと、掾は言いわけができなくなったので、褒はかれを杖打した。すると掾が、「行在所へ行って帝に訴えるぞ」とわめき立てたため、褒は怒って百餘りも杖を加え、それがもとで掾は死んでしまった。元褒はこの事件で兇官處分を受け、家で卒したという。⁽⁷⁾ 元褒が西曹掾を死ぬまで杖打したのは、煬帝に告發されることへの恐怖からであろう。一方、西曹掾が督役を忌避した背後には、高句麗戰爭に苦しむ民衆の姿があるであろう。煬帝——郡守——西曹掾——民衆という系列の中で、郡守と郡吏の間に殺人事件が発生したわけである。もしこの事件が起らなければ、元褒は良き太守として地方官生活を完うしたかも知れなかった。⁽⁸⁾

この事件に比べると、次に紹介する魏德深の縣行政にはやや救いがあるが、その背景にあるものは、やはり當時の地方官界のきびしい環境である。魏德深は清廉潔白とその行政能力により武陽郡管下の貴郷縣（河北省大名縣）の縣長になった人であるが、同じく高句麗戰爭のためのひっきりなしの徵稅で郡縣が負擔にあえいでいたとき、貴郷縣のみは、縣内の相互協力體制を作り上げ、たがいには無あい通じて、そのノルマを達成し、縣民も困窮するところがなかったという。⁽⁹⁾

やがて盜賊が蜂起し、武陽郡管下の各都市はつぎつぎに陥落した。郡丞元寶藏は詔を受けて討伐作戰を展開するが、悉く失敗して、武器も盡き果てた。そこで軍法を以て管下諸縣に調達を命じた。近隣の各縣では役所を作業場として吏員が交代で督責に當り、夜となく晝となく大騒ぎで武器製造につとめたが、それでも仲々間に合わない状態であった。しかし

德深の方はそれと違っていた。德深は仕事を各自の希望によって分擔させ、適宜製造を行わせたので、役所はいつものようにひっそりとしたものであった。ただ幹部たちに對して、他縣以上に成績を上げようとして民衆に苦勞をかけないようにと申し渡したただけであった。しかしそれでも下部ではそれぞれ一生縣命にやって、いつも各縣のトップの成績を上げたのである。⁽¹⁰⁾

武陽郡は永濟渠の沿線にあり、また張金稱、高士達、竇建德ら劇賊の跳梁のはげしい地方である。その討伐に必要な武器の製造においても、魏德深は縣民の自發性を尊重し、かれらを結束させて、その負擔を乗り切ったのであるが、この逸事の背後には、煬帝——郡守元寶藏——各縣の令長——縣民という統屬系統を通じての重壓と官吏間の競合關係が看取できるのである。

このような政治情況のもとで、地方民衆の運命は、所屬の地方官が多少とも民衆の生活に同情心をもつか否かによって、大きく左右されるであらう。次に述べる、竇建德叛亂のきっかけとなった孫安祖の事件も、もし縣令がいくらかでも縣民をあわれむ氣持を持ち合わせていたならば、あるいは起らなかったかも知れない。孫安祖の事件とは、大業七年、第一回目の高句麗出兵に當って實施することになった募兵令に端を發するものである。このとき竇建德は本郡(清河郡)の選拔を受けて、二百人の長に任ぜられたが、同縣(潭南縣)の孫安祖もまた兵に充てられた。しかし時に山東地方は大害のため三十餘郡が水没するという情況で、安祖も家を流され、妻子は餓死するという悲運に見舞われた。安祖は兵役の免除を縣令に願ひ出たが、縣令は怒って安祖を笞打った。激昂した安祖は縣令を刺殺して、建德のもとに身を投ずる。義俠心のあつた建德はこれを匿まったが、やがて逃亡兵・無產者數百人をつけて、廣大數百里といわれる高雞泊(清河郡境内)に逃がしてやった。そのうちに竇建德自身が群盜と通じているという嫌疑を受け、家族をみな殺しにされるに至った。かくて建德自身も亡命を決意し、群盜高士達の集團に身を投ずることになる。⁽¹¹⁾

竇建德はそこご敗死した高士達の遺衆を掌握して官軍と戦い、しだいに河北全域の制覇の道を進んで、ついには夏國を

建設する。寶建徳の人となりと霸業については、氣賀澤保規氏の專論を始め多くの研究があるので、⁽¹²⁾ここでは紹介を省きたい。ただ、かれの亡命の意味するところを考えてみると、寶建徳は、自分の使っていた耕牛を賣って貧しい郷民の葬儀を出してやったという俠氣の人であり、郷黨のあつい信望を集めた。父の葬式の際には、千人の會葬者があったという。そうした郷民の支持の下に、里長をつとめている。

煬帝の獨裁政治が官僚組織を通じて、上から下へ、いわばタテ方向につき進んでくるとき、寶建徳と郷民とを結ぶ任俠的な信頼關係は、ヨコの連帶線を形づくって、これに對處するであろう。同郷の孫安祖がかれの許に庇護を求めたのが、その一例である。しかし今や郷黨社會を維持するこのヨコの連帶線も守り切れず、その中心に位置する寶建徳自身が亡命をよぎなくされるに至ったのである。かれの亡命以後、同郷の人びとの生活は、一段と存立の困難さを増したと想像される。⁽¹³⁾

寶建徳が亡命して身を投じた高士達は、勃海郡蓊縣（河北省景縣）の人、いわゆる勃海高氏である。建徳は、士達の敗死後その遺衆を掌握して勢力を築いてゆくのであるが、その経過について、『資治通鑑考異』所引の『革命記』によれば、高士達の亡きあと同族高德政らと共に離散した兵士を集め、五萬人を得て高雞泊中に入った。高德政は東海公と自稱し、寶建徳を長史とした。高德政の死後、軍は高氏一族派と寶建徳派とに分れて對立し、兩者が激突したあげく建徳側が勝利して、全軍を統一掌握したという。⁽¹⁴⁾『通鑑考異』は兩派對立の事實を疑い、この記事を採用していないが、高氏一族が軍の中核をなしていたことまで否定することはできないであろう。元來蓊縣の地に平和な生活を営んでいた高氏が、それが維持できなくなって、宗族ぐるみ内亂にコミットして行ったことが想像されるのである。

平原（山東省德州市附近）の劉霸道についても、同じようなことが言える。劉霸道の家は、豆子航の近傍にあったという。豆子航は勃海灣を背にし、黃河に接した低濕地帯で、北齊以來、群盜亡命の地であった。霸道の家は累世仕官し、資産豊かな豪族であるが、霸道は俠氣に富み、食客つねに數百人あったという。内亂が起ると、遠近から赴いて依附する者

多く、ついに十餘萬の勢力となった。その勢力は「阿舅賊」とよばれたという。⁽¹⁵⁾「阿舅」とは、親分肌の劉霸道を指したものである。⁽¹⁶⁾

劉霸道のその後の活動については皆目分らない。その勢力「十餘萬」というのも、複数の群盜集團の總計であり、劉霸道が最高の頭目としてシンボリックな位置を占めていたのかも知れない。⁽¹⁷⁾しかし、土地の名望家が群盜の庇護者となつてゆくところに、地域社會が内亂の中に地すべりしてゆく情況がうかがわれるであろう。

以上、竇建德、高士達、劉霸道の三例を挙げたわけであるが、いずれも、その土地の名望家でなければ、郷民の信頼を得た任侠の士であつた。その他、當時山東に崛起した群雄の姓が、六朝以來の名族のそれに一致する例が少くないことは、この内亂の特徴である。⁽¹⁸⁾そして、その活動範圍がおおむねその郷里周邊であることも、注目されてよい。⁽¹⁹⁾これらは、この内亂の地方的性格を暗示している。煬帝のいわゆる殘暴政治は、集權的官僚組織を通じて地方民衆の生活を破壊し生存をおびやかすのであるが、それは地方社會の自律的機能を弱める結果となつた。しかし、そこに發生する抵抗運動にも、地方社會の殘影がさまざまな形で投映されていると考えられるのである。⁽²⁰⁾

三 剽掠と自衛

郷里を捨てて群盜と化した有名無名の人びとは、爾來どのような行動に出るのであろうか。張玄素が明言したように、もともと彼らには、隋朝打倒というような政治目標はなかった。隋朝の大官楊玄感の叛亂が敗北に歸して潛行をよぎなくされた玄感の謀主李密は、群盜の間を轉々としたあげく、ようやく瓦崗（河南省滑縣）に據る翟讓に受け容れられる。李密の究極の目標は煬帝打倒にあるわけであるから、何とかして翟讓をその目標に向つて歩ませようと努める。大業十三年二月、かれは、翟讓に向つて、洛陽東方の興洛倉襲撃計畫を提案するが、そのときの言葉に曰わく、「あなたは英傑の才を以て驍勇の軍を統べておられるのですから、惡黨どもを誅滅して天下澄清に當られるべきです。食を草間を求める小っぱ

けな盜賊で終ることはありません」と。これは、天下一統に向つて戰略を轉換することの提唱である。しかし翟讓はその提案に應じない。「僕は隴畝の間に起つた者で、そんな望みはもっていません。もしそうしたいというのなら、君が先發しなさい。僕は各隊を率いてしんがりをつとめよう。その問題は、興洛倉が取れたあとで相談すればよい」⁽²¹⁾。天下を取ることに甚だ消極的な翟讓の氣持がよく現われている。翟讓に限らず、當時河南方面で活動していた群盜たちは、みなそうであつた。潜行中の李密はかれらを説得してまわつたが、だれも相手にしなかつた。再び『通鑑考異』所引の『革命記』によれば、李密は平原の郝孝德に向つて、「私の策を用いてくれたら、河朔は思いどおりに平定できますよ」と言つたが、孝德は、「我等はもともと饑荒のために生命をつなごうとして起ち上つたもの、その他に何の企圖もありません。貴公がここにいられることを朝廷が知つたら、この孝德はたちまちやられてしまふ。翟讓の方が大部隊だから、兵をつけて貴公をそちらにお送りしましょう」⁽²²⁾と逃げた。『通鑑考異』はこの對話も採用していないが、たといフィクションであるとしても、當時の群盜のあり方をよく描寫しているように思われる。⁽²³⁾要するに、革命を起すなど群盜たちにとっては思ひも寄らぬことで、そうした野心をもつ札付きの李密などを抱えこんでいては、たちまち官軍の標的にされてしまふ。早く他人の所へ送りこんでしまえ、というわけである。

では、かれらの目標は何であつたか。いうまでもなく物資を剽掠して生命をつなぐことである。『資治通鑑』卷一八一、大業七年十二月の條に、當時の一般情況をつぎのように記す。

百姓困窮、財力俱竭、安居則不勝凍餒、死期交急、剽掠則猶得延生、於是始相聚爲羣盜。

『通鑑』はこう述べた上で、この大業七年當時の群盜の例として、先述した竇建德・劉霸道と共に、齊郡管内の長白山に據つた、同郡鄒平縣（山東省鄒平縣）出身の王薄を擧げている。王薄は知世郎と自稱し、「無向遼東浪死歌」を作つて民衆に亡命を働きかけたことでよく知られているが、その行動形態を見ると、齊濟之郊を剽掠したという『通鑑』卷一八一。つまり長白山を根據地として、その地の行政機關のある齊郡および鄒郡である濟郡の郡城などを襲ひ、物資を掠奪しては

引き揚げるといやり方であつたらしい。⁽²⁴⁾ここにはまだ、それらの郡城を占據して確保するという戦略はない。これは他の勢力も、大體において同じパターンであつたようである。例えば、

〔大業九年春正月〕壬午、賊帥杜彥冰・王潤等陷平原郡、大掠而去〔隋書〕卷四煬帝下。

〔同年三月〕庚子、北海人郭方預聚徒爲盜、自號盧公、衆至三萬、攻陷郡城、大掠而去〔同右〕。

この二例はいずれも物資の獲得を郡城攻撃の目的としているのであつて、攻陥した郡城そのものは放棄している。これが内亂初期における群盜の一般的行動形態であつて、これを圖式化すれば、根據地から郡縣城へ、ということにならうか。

その根據地となつたのは、既出の長白山・高雞泊・豆子航の他、深澤⁽²⁵⁾・恆山⁽²⁶⁾・狗蹲山⁽²⁷⁾・五不及山⁽²⁸⁾・懸薄山⁽²⁹⁾・林慮山⁽³⁰⁾・蒼山⁽³¹⁾・瓦崗⁽³²⁾・河曲⁽³³⁾・周橋⁽³⁴⁾などの山澤が擧げられる。それらの根據地もまた、剽掠作戰の基地であつた。

これらの根據地は、大體においてそれぞれの郷里に比較的近い地點に設定され、従つてまた剽掠の目標も、その郷里附近に定められた。このことは、剽掠の對象として、往々にして同郷の人びとの資産をも含むことがあつたことを豫測させる。後年、唐朝の名將となつた徐世勣（李勣）は、少年の時、翟讓の軍に身を投じたが、彼は讓に向つて言った。「この土地は、あなたや私の郷土で、みなお互いに知り合いです。彼らを侵掠するのはよくありません。ところで宋（梁・鄭（滎陽）の兩郡は御河（通濟渠）の經由地で、商旅が往復し、船舶も絶えることがありません。あちらへ行つて物資を強奪すれば、十分やつてゆきましょう⁽³⁵⁾」と。翟讓もこの提案に賛成するのであるが、このことから見ると、剽掠が官有の倉庫などを對象とするのみでなく、なお郷里に止まっている民衆自身にも及んでいたことが分る。『通鑑』卷一八三、大業十二年十二月の條に、

民外爲盜賊所掠、内爲郡縣所賦、生計無遺。

とあるが、その盜賊こそ、實はかつての同郷者である例が、決して珍らしくなかつたのである。

煬帝の暴政とこれに追隨便乗する官僚たちの收斂は、無数の群盜を生んだ。そして、その群盜が、民衆自身しかも往々にして同郷の民を剽掠の對象とするという悲劇的情況を生んだのである。ことわっておくが、私はこうした群盜の行爲を最初から非難するつもりはない。その中には投機分子もかなり交っていたと想像されるが、もとはと言えば、剽掠は、壓制と饑餓に追いつめられた民衆の、已むを得ない行爲であった。しかし、だからと言ってそれを正當化することもできないし、いわんやこれを革命的行動として稱揚することもできない。私たちは、民衆による民衆の掠奪という事實を直視し、この陰慘で閉塞的な時代情況がそのどう克服されてゆくかを見守らなければならない。⁽³⁶⁾

さて、群盜の掠奪から身を守るために、民衆は當然防衛手段を講ずる必要に迫られる。大業十年、長白山に據る孟讓が諸郡を寇掠して南方の盱眙に及び、勢力十餘萬を擁するのであるが、『舊唐書』卷五四王世充傳に、この時の情況を述べて、「時百姓皆入壁、野無所掠、賊衆漸餒」と記すが、『通鑑』卷一八二、大業十年十二月の條にも、同じ事を、「時民皆結堡自固、野無所掠、賊衆漸餒」と述べる。いわゆる堅壁清野である。この結堡自固の具體例を見ると、

劉君良、瀛州饒陽人也、累代義居、兄弟雖至四從、皆如同氣、尺布斗粟、人無私焉、〔中略〕屬賊起、閭里依之爲堡數百家、因名爲義成堡（『舊唐書』卷一八八孝友・劉石良）。

饒陽縣は現河北省饒陽縣、この地方は格謙、竇建德、魏刀兒らの活動地域であるが、累世同居の劉氏を中心に、地域住民數百家が結堡自固したのである。

李君球、齊州平陵人也、父義滿、屬隋亂、糾合宗黨、保固村閭、外盜不敢侵逼、以功累授齊郡通守（同右卷一八五上良吏上・李君球）。

平陵は現山東省歷城縣、齊郡の管轄下にある。この地は長白山に立て籠る諸賊の剽掠の目標となったはずである。

李育德、趙州人、祖諱、仕隋通州刺史、爲名臣、世富于財、家僮百人、天下亂、乃私完械甲、嬰武陟城自保、人多從之、遂爲長、劇賊來掠、不能克（『新唐書』卷一九一忠義上・李育德）。

『冊府元龜』卷一六四帝王部・招懷二にもほぼ同様のことを記して、次のように述べる。

李育德、趙郡人也、祖諱隋通州刺史、寓居武陟、隋末亂乃繕脩器械、嬰古城以自保、遠近多附之、王德仁等攻之、皆不能克。

この兩文を総合すれば、李育德は名族趙郡李氏に屬するが、寓居先の武陟（現山西省武陟、當時は河内郡に屬する）で、その古城に據って自保し、遠近の民衆も李氏を頼ってやって來た。その固守の力により、林慮山を根據地とする王德仁も、これを陥れることはできなかったのである。

後に唐の功臣となった程知節も、同じく郷里自衛の中心人物であつた。

程知節本名讎金、濟州東阿人也、少驍勇、善用馬稍、大業末、聚徒數百、共保郷里（『舊唐書』卷六八程知節）。

これらの記述はいずれも自衛の中心となつた人物の指導性を顯賞するものであるが、前述したように、それは、民衆の剽掠に對する民衆の自衛行爲なのである。その剽掠する側について、『隋書』卷二四食貨志に次のように記している。

舉天下之人十分、九爲盜賊、皆盜武馬、始作長槍、攻陷城邑。

十分の九が盜賊となつたというのは誇張に過ぎるとしても、盗んだ軍馬や始めて作つた長槍が、官府のみならず、民衆の聚落にまで襲ってくるのである。

こうした出口のない情況を思い浮べるとき、いくつかの事例が、わずかに救いのようなものを感じさせる。それは、群盜が各地の義門に對して侵犯を避けることが少くなつたことである。例えば、趙郡の名門李知本は孝悌の念に篤く、仲睦しい家族生活を營んだが、盜賊たちは、「義門を犯す無かれ」と誠めあつた。そこで李氏を頼って避難して來る者が五百餘家あつたという⁽³⁷⁾。本稿の對象外の地域であるが、蒲州・安邑（山西省安邑縣）の張志寬についても、同じことが見られる。張氏も孝義で郷里の賞賛を得ていたが、賊帥王君廓はその聲名を聞いてその聚落を犯さず、そのおかげで郷里は侵掠を免れることができた。やがて張志寬は里正となっている⁽³⁸⁾。

右の李・張兩氏の社會的地位は必ずしも同じではないが、いずれもその道德生活によつて郷里に影響を與えることの大きかった人びとである。その意味では、亡命以前の竇建德も同じ位置にあった。殺掠・放火を事とする盜賊が竇建德の居住區にだけは立ち入らず、それがかえつて官憲の嫌疑を受ける結果となつたのである。饑饉に苦しむ盜賊たちが敢て義人の村間に立ち入らなかつたのは、そこに官僚支配と質を異にする人びとの自發的連帶に自ら共鳴したからであらう。

しかしそれは全體から見れば、例外にすぎなかつた。李知本と同じく趙郡の出身である李德饒は、その住む村里が孝敬村・和順里と名づけられて表彰を受けるほどの至孝の人で、その德行は遠く格謙や孫宣雅など山東の大賊にまで知れわたつてゐた。格謙・孫宣雅らが朝廷の赦宥の詔を受けて歸首しようとしたとき、かれらは保證人として李德饒を指名した。しかし德饒はその任に赴く途中、他賊の掠奪戰に巻きこまれて殺されてしまつた。⁽³⁹⁾特定の賊帥には信頼されたかれも、情況の犠牲となることを免れなかつたのである。

剽掠に明け暮れる者と、堡壘を築いてこれを守る者と、位相を異にするものの間に、かすかな共感の交流する瞬間はあつた。しかしそれは特別の例にすぎない。民衆間の對立關係が解消を見るためには、やはり政治秩序の回復に期待するより他にないのではなからうか。しかしそれは、どういう仕方で實現されてゆくのであらうか。これを次章に見たい。

四 州縣秩序の再建

さきに結堡自衛の一例として舉げた李義滿の場合を見ると、彼は、賊盜を寄せつけなかつた指導力が認められて官に取り立てられ、齊郡通守にまで昇進している。通守は煬帝時代に新設された太守の副貳で、郡丞の上に置かれた。いわば實質的な太守で、この内亂に對應して設置されたものである。⁽⁴⁰⁾李義滿のその後の動向を見ると、

武徳初、遠申誠款、詔以其地爲譚州、⁽⁴¹⁾仍拜爲總管、封平陵郡公。

とある。『新唐書』卷三八地理二、齊州章丘縣の條によれば、

武德二年、縣民李義滿以縣來降、於平陵置譚州、并置平陵縣、以章丘・亭山・營城・臨邑隸之、〔中略〕貞觀元年廢。とあるので、李義滿の郷里平陵は、當時章丘縣内にあり、この地に新らたに平陵縣を置くと同時に、既存の章丘縣はか三縣を併せて譚州を新置したことが分る。つまり、彼が平陵を「保固」して外敵から守った實績の上に、唐朝は齊州管内に譚州を新設し、義滿を總管に任命したのである。⁽⁴²⁾

次に、先掲、武陟城に自固した李育徳は、

隋亡、與柳燮等歸李密、私署總管、密爲王世充所破、以郡來降、卽拜陟州刺史〔『新唐書』卷一九一忠義上・李育徳〕。

とあって、李密の總管から唐の陟州刺史に移っている。⁽⁴³⁾さらに、よく似たケースを挙げると、

李公逸、汴梁雍丘人也、⁽⁴⁴⁾隋末、與族弟善行、以義勇爲人所附、初歸王世充、知其必敗、遣間使請降、高祖因以雍丘置杞州、拜爲總管、封陽夏郡公、又以善行爲杞州刺史〔『舊唐書』卷一八七上忠義上・李公逸〕。

この例では、雍丘地方（現河南省杞縣）を自衛した李公逸らがはじめ洛陽の王世充に歸附し、のち唐に降ったので、唐はこの地に杞州を新設して、公逸らを、總管・刺史に任じている。⁽⁴⁵⁾

張善相、許州襄城人也、大業末、爲里長、每督縣兵逐小盜、爲衆所附、遂據本郡、歸於李密、密敗、以城歸國、高祖授伊州總管〔『舊唐書』卷一八七上忠義上・張善相〕。

ここに本郡とあるのは、隋の襄城郡（現河南省襄城縣）であり、唐がここに伊州を置いたのは、兩唐書地理志によれば、武德四年のことである。里長が官兵を率いて盜賊を防いだという點で、先の數例と異なる所があるが、張善相その人の指導力によって地域の秩序が保たれ、その地域の統制にもとづいてまず李密に結びつき、のちに唐に歸して、伊州刺史が授けられたのであった。

さて、以上の諸例に共通するところは、地方防衛の指導者が盜賊と戦いつつ、王世充、李密などの群雄に結びつき、そして最終的には唐朝に歸屬している點である。さらにその歸順の形式として、各勢力からその地域の總管・刺史などを授

任されている點も共通している。つまりそれは、自衛してきた郷里社會が、群雄の樹立する政權の地方組織に組み入れられて行ったことを意味する。ここに、隋朝、剽掠を事とする群盜、その兩者から收斂・掠奪されて自衛を餘儀なくされる郷民という三極構造に、政治的變化が現われたのである。その變化は、およそ二つの面から進行する。一つは、煬帝政權の解體であり、それは李淵の掌握する長安政權、王世充によって統御される洛陽政權、そして煬帝の殺害によって生れた宇文化及の集團の三つの部分に分裂するが、最終的には、前二者が生き残ってゆく。もう一つは、剽掠集團から政權樹立へという群盜の脱皮成長であり、李密と竇建德がそれを代表するであろう。⁽⁴⁶⁾ 各地域の自衛組織は、こうした情勢の變化に基づいて、それぞれの政權に自らを附託し、各政權もまた勢力擴大のためにそこに總管・刺史を置いたと考えられる。以下、このことについて、少しく述べてみたい。

長安・洛陽の兩勢力が最初から中央政府と共に州(郡)縣機構を持っていたことは、いうまでもないであろう。しかし、最初、その掌握範圍は首都とその周邊に限られており、とくに唐にとつては、その擴大過程がすなわち統一過程であったと言える。

一方、義寧元年二月、興洛倉の占據に成功した李密は、壇場を設けて魏公の位に即いた。同時に、魏公府と行軍元帥府の二府を開いて、それぞれ官屬を置いた。かくて、「趙魏以南、江淮以北、群盜莫不響應」(『通鑑』卷一八三)という勢力を示すに至った。李密は歸順した群盜を羈縻して總管としたが、⁽⁴⁷⁾ 總管の下には當然州縣があつたはずである。例えば、先述した襄城郡の里長張善相は、襄城に據つて李密に歸附したが、李密から伊州刺史に任ぜられたようである。

李密所置伊州刺史張善相來降(『通鑑』卷一八七、武德二年一月丙寅條)。

また、李育德は李密の總管から、唐に歸した(前掲)。⁽⁴⁸⁾ これらはいずれも李密の敗北後、唐に歸附しているが、李密の「將帥・州縣」の多くは、洛陽側に降つたという。

このように、李密は、瓦崗軍の群盜的性格を拂拭して、中央―地方の行政システムを具えた政府を樹立し、そこに各地

域集團を包攝してゆこうとしたが、それは業半ばにして挫折した。それでは、竇建德についてはどうであろうか。

『通鑑』卷一八三によれば、竇建德は、義寧元年正月丙辰、樂壽（現河北省獻縣）に壇を築いて長樂王と稱し、百官を置いてゐる。これは李密の魏公即位の少し前である。翌武德元年七月には、樂壽を都と定め、その居所を金城宮と號した。そしてこの年十一月、國號を夏と定めてゐる。彼はさらにその翌年十月には、洛州に萬春宮を築いて遷都してゐるが、これはいよいよ中原に覇を爭うためであつたと思われる。彼が政權樹立に向つて決定的に踏み出したのは、武德元年の樂壽奠都の時ではなかつたであらうか。このとき、粘り強く抵抗してゐた河間郡丞王琮が降り、部將たちは彼を殺すことを勧めたが、竇建德は、王琮を義士と稱え、「以前高雞泊にひそんで小盜をはたらいいていた時分には勝手に人を殺すこともできたが、百姓を安んじ、天下を定めようとする今ではどうして忠良の人物を殺すことができようか」と言つてこれを赦し、しかも即日瀛州刺史を授けた。瀛州は隋の河間郡の改名で、樂壽の所在地である。そしてその直後に、樂壽定都を實行してゐる。『新唐書』卷八五竇建德傳によれば、

〔大業〕十四年五月、更號夏王、建元丁丑、署官屬、分治郡縣。

とある。この記事には疑わしい部分もあるが、⁽⁴⁹⁾國家體制の確立へ向う武德元年（大業十四年）の時點で、州縣制も整へられて行つたことが推測される。

李密の魏國は、もと隋朝官僚の彼が瓦崗の群盜集團に便乗して打ち樹てたものであるが、竇建德の夏國は、群盜集團そのものが脱皮成長して誕生したものであつた。その過程で竇建德が多くの隋朝官僚を受容し、その力を借りたことはよく知られてゐる。河北一帯をほぼ制壓した夏國は秩序がよく保たれ、⁽⁵⁰⁾『通鑑』卷一八八武德三年二月の條には、

建德〔至〕洛州、勸課農桑、境內無盜、商旅野宿。

とある。洛州に遷都してからの夏國の狀況を述べたものであるが、「境內無盜、商旅野宿」の二句は、剽掠戰爭に明け暮れた河北平野にも、漸く平和が訪れ初めたことを示唆してゐる。それはもとより竇建德の指導力によるものではあるが、

州縣機構が國內に張りめぐらされ、地方社會が中央政權との連携を回復したことなく無縁ではないであらう。寶建德の普樂縣令となつた人物に洺州平恩の程名振があり、治名高く群盜もその境域を犯さなかつたといふ⁽⁵¹⁾。普樂縣は今日の河北省雞澤縣で、程氏の郷里平恩の西北二〇キロメートルばかりの所にある。名振が普樂縣令に任命されたのも、その郷里における指導力によるものとおもわれる。こうした力量を州縣制に組織することによって、夏國の平和と秩序が築かれてゆくのであらう。

寶建德政權の地方行政組織としては、州縣制のほか、行臺制度によつて、自立する渠帥を羈縻することもあつたやうである。たとえば、武德四年春正月丁卯に寶建德の行臺尚書令胡大恩が大安鎮に據つて唐に來降しているが、『通鑑』卷一八八武德四年春正月癸酉の條によれば、胡大恩は恆山出身とあり、あるいは前述した恆山の賊趙萬海の一味であつたかも知れない。その胡大恩も一時は寶建德に臣従して、この地方を治めていたのである。

さて、これまで提示してきた諸資料からすれば、李密、王世充、寶建德らの群雄に歸附して、總管・刺史・縣令など各級の地方機構に組み入れられた在地指導者たちは、終局的には、唐朝の總管府・州・縣制に組み入れられてゆくことが窺われるであらう。勿論、史料の性格上、唐朝に歸順した者のみの例が残されたことは考慮しなければならないが、ともかくも、唐の統一政權が、こうした在地指導者を中心として守られてきた地方秩序を基礎に築かれてゆくことは否定できないのである。

『通鑑』卷一九二貞觀元年二月の條に、

初、隋末喪亂、豪傑並起、擁衆據地、自相雄長、唐興、相帥來歸、上皇爲之割置州縣以寵祿之、由是州縣之數、倍於開皇・大業之間、上以民少吏多、思革其弊、二月、命大加併省、因山川形便、分爲十道、云々。

とあり、『舊唐書』卷三八地理一にも、

總管府、以統軍戎、至武德七年、改總管府爲都督府、自隋季喪亂、羣盜初附、權置州郡、倍於開皇・大業之間、貞觀元年、悉令併省、始於山河形便、分爲十道、云々。

と、唐初の總管府・州・縣の設置狀況を概述している。この兩文によれば、武德年間、歸降した豪傑・群盜のために州・縣を設置してかれらを優待したが、その數が隋代に倍するほどになったので、貞觀元年二月、これを併省したという。そして、その具體例は、これまで紹介してきた郷里自衛の指導者についても、多く見ることができるのである。

姓 名	自衛地點	職 名	設置時期	廢止時期	管 轄 地 域	備 考
李 義 滿	平陵	譚州總管	武德二	貞觀元	平陵、章丘、亭山、營城、臨邑	
李 公 逸	雍丘	杞州總管	武德四	貞觀元	雍丘、陳留、襄邑、外黃、濟陽	
(族弟) 李 善 行	雍丘	杞州刺史	武德四	貞觀元		
李 育 德	武陟	陽州刺史	武德二	武德四	修武	
(兄) 厚 德	武陟	殷州刺史	武德二	貞觀元	獲嘉、武陟、修武、新鄉、共城	殷州へ併入

右の表は貞觀元年に併省されたもののみであるが、それ以後も存続した州についても、いくつかの例を見ることができ。そのひとつは、前掲した張善相の例である。善相は里長となって縣兵を統率して地方の治安を守ったが、ついに襄城郡に據って李密に歸し、のち唐に降って、伊州總管を授けられている。伊州は貞觀八年に汝州と改められ、以後も存続している。いま一つの例に、潁州がある。

信州城、在縣西北十五里、隋大業十四年郡城爲賊房獻伯所陷、其年、郡民江子建率衆于險處作柵、唐武德二年、授李建信州刺史、以柵近汝南襄信縣、故名信州、四年、復爲潁州(『太平寰宇記』卷一一潁州汝陰縣)。

ここに郡城とあるのは、隋の汝陰郡である。唐は武德二年に信州を置いたが、それは、郡民江子建が賊を避けて立てこもった柵のある場所に於てであつた。やがて潁州と名を改め、その頃、治所も移したようである。以後潁州は唐末まで存

續する。

地方社會を固守してきた指導者に、その地の州刺史を授與したらしい例は、他にも見出せるが、ただ群盜の歸順者に對して總管・刺史等を授けた例もあり、⁽⁵⁴⁾その両者が區別しがたい點もある。その史料上の不分明さは、また、その實態に由來しているかも知れない。なぜなら郷里自衛の集團がいずれかの政權に歸屬するとき、それは時に政權の一部隊として働くことがあり得るからである。⁽⁵⁵⁾しかし要するに、群盜出身者であれ、郷里自衛の指導者であれ、それらが政權の中に統合されると、その一部は、州縣制の中に組み入れられて行つたのである。そして、その過程の最終的結果が、唐の全國統一であつたと言ふことができる。

とすれば、唐朝は、これら盜賊や自衛集團指導者の歸屬によってその州縣支配を確立しおわつたかというところ、事はしかく簡單ではない。というのは、彼らが唐朝より總管・刺史に任命されても、やがて交送される例が非常に多いからである。⁽⁵⁶⁾その一々を舉例することは避けたいが、試みに郁賢皓氏の『唐刺史考』（中華書局香港分局・江蘇古籍出版社、一九八七年）を検索するならば、それは一目瞭然である。唐朝はまず彼ら地域指導者を懷柔し、その力を利用しつつ、やがてこれを交送し、また新置の州の一部についてはこれを改廢統合して、州縣制の整備を進めて行つた。その整備が完了した時點を太宗即位の貞觀元年とするのは、決して不當ではないであらう。

五 結 語

小論は、冒頭に引いた張玄素の言葉を出發點として、隋末唐初の内亂の構造を考察した。玄素のいう、「餘皆保邑全身、思歸有道」とは、行論の中で提示してきたどのような勢力を想定するのか必ずしも明瞭ではないが、剽掠の群盜も、またこれを防衛する地域集團も、大方の民衆の僞わらぬ氣持はひとしくそういうものであつた、と解したい。政治に野心を抱く極めて少數の人びとを除いて、大多數は、生命の保全と生活の安定こそ、究極の目的であつた。しかし、民衆のこ

の共通した欲求が、かれら自身を、剽掠と自衛の相對立する關係に追いこんでゆく。こうした歴史的事態の眞の原因は、いうまでもなく、煬帝の政治にある。この悲劇的現實をいかに癒してゆくかが、野心家たちの課題でもあったにちがいないが、私はそのことを考える前に、各地に結成された地域防衛集團の果した役割を重視したい。とめどもない亂離に墮ちこんでゆく當時の情勢にあって、これを必死に食い止めていたのが、そうしたグループであったからである。それは州縣制再建の基礎となって、地方社會の安定に貢獻してゆくのである。

私は多年、魏晉南北朝社會の基層構造に關心を抱いてきた。そして、そこには一貫して郷望と鄉民との自發的結合が働らき、それがまた政治權力の基礎をなしたことを主張してきたが、隋末唐初の内亂においても、相似た構造が看取されるのである。かつての指導層は豪族乃至貴族という表現にふさわしい階層であった。一方、この時代の指導者たちを一概にそうよぶことができるかどうか、細かな検討を要するけれども、かれらがその郷里社會に強い人格的影響力をもち、それが自衛に際しての指導力になったことは疑いない。前述のように、かれらが總管・刺史に任ぜられた期間は決して長くはないけれども、その機會に獲得した官爵が、以後彼らに士大夫身分を保證したことはいうまでもないであろう。その身分が更に子孫によって繼承されてゆくととき、そこに唐朝貴族集團の一員たる資格が生れるわけである。しかし、これらの問題については、稿を改めて論じなければならない。

註

(1) 『隋書』卷二百官志下に、煬帝の地方行政改革を記して、「縣尉爲縣正、尋改正爲戶曹・法曹、分司以承郡之六司」とある。

(2) 「始、玄素與孫伏伽在隋皆爲令史、太宗嘗問玄素官立所來、深自羞汗、云々」(『新唐書』本傳)。この令史がいかなる令史であつたかは分らない。ちなみに、孫伏伽の場合を見

ると、「大業末、自大理寺史累補萬年縣法曹」(『舊唐書』卷七五本傳)とある。

(3) 隋末唐初の叛亂に關する從來の研究について、とくにその研究觀點を取り上げて論じた論考に、氣質澤保規氏の「隋末唐初の諸叛亂の評價をめぐる」(『東洋史苑』一三)がある。氏は、從來の諸研究が、叛亂に参加した民衆の役割につ

いて過少評價があり、あるいは積極的に評價を加えようとしても、それは當時の民衆に對する內面的理解に基ついたものではない、とする。そして、民衆が叛亂を通じて追求した世界は、かれらを本來成り立たしめる所の鄉村社會の回復にあらたとする。こうした見方を具體的に論證しようとしたのが、右の論考に先立つて發表された「竇建德集團と河北——隋唐帝國の性格をめぐる——」（『東洋史研究』三一—四）である。すなわち、竇建德こそは、民衆の希求したものを實現しようとした叛亂領袖であり、それは關隴系諸國家の統治體制への反抗であつたといふのである。叛亂の原因となつた煬帝の暴政を關隴系國家の政治路線とすることには疑問があるが、それは一先ずおき、隋末唐初の叛亂を民衆の內面から理解しようとする氣賀澤氏の觀點には少なからぬ共感を抱くものであり、本稿の趣旨もこれと合致する。ただ、氏は竇建德叛亂集團を反關隴勢力と前提しつつ分析を進めてゐるために、民衆の實體に即した論述とは言い切れぬものがある。民衆の生を希求する仕方は多様な姿で現象するのであつて、鄉村秩序回復の欲求は、決してストリートに行動化されるわけではない。むしろそれが却て秩序破壊の行動を惹起することもあり得る。要するに、民衆の內亂におけるありのままの姿を観察することから、すでに論議しつくされたかに見えるこの内亂の構圖をもう一度えがいてみるのが、本稿の目的である。

(4) 「于時皇綱不振、人皆變節、左翊衛大將軍宇文述、內史侍郎虞世基等用事、文武多以賄聞」（『隋書』卷六七裴矩）、「其

後隋政漸亂、朝廷靡然莫不變節、彥謙直道守常、介然孤立、頗爲執政者之所嫌」（同上卷六六房彥謙）、「于時天下大亂、百姓飢饉、道路隔絕、仁恭頗改舊節、受納貨賄、不敢輒開倉廩、賑恤百姓」（同上卷六五王仁恭）。

(5) 「侍中魏徵進言曰、〔中略〕隋主先命在下、多作獻食、獻食不多、則有威罰、上之所好、下必有甚、競爲無限、遂至滅亡」（原田種成『貞觀政要定本』補篇）。具體例を挙げれば、「帝至江都、江淮郡官謁見者、專問禮餉豐薄、豐則超遷丞・守、薄則率從停解、江都郡丞王世充獻銅鏡屏風、遷通守、歷陽郡丞趙元楷獻異味、遷江都郡丞、由是郡縣競務刻剝、以充貢獻」（『資治通鑑』卷一八三天業十二年十二月條）。獻食が少ないために處罰された郡守に乞伏慧がある（『隋書』卷五五本傳）。

(6) 註(5)參照。

(7) 『隋書』卷五〇元褒。

(8) 『隋書』元褒傳に、「煬帝即位、拜齊州刺史、尋改爲齊郡太守、吏民安之」とある。

(9) 「德深初爲文帝挽郎、後歷馮翊書佐・武陽司戶書佐、以能遷貴鄉長、爲政清淨、不嚴而治、會興遼東之役、徵稅百端、使人往來、責成郡縣、于時王綱弛紊、吏多贓賄、所在徵斂、下不堪命、唯德深一縣、有無相通、不竭其力、所求皆給、百姓不擾、稱爲大治」（『隋書』卷七三循吏・魏德深）。

(10) 「于時盜賊羣起、武陽諸城多被淪陷、唯貴鄉獨全、郡丞元寶藏受詔逐捕盜賊、每戰不利、則器械必盡、輒徵發於人、動以軍法從事、如此者數矣 其鄉城營造 皆聚於廳事、吏人遞相

督責、晝夜喧驚、猶不能濟、德深各問其所欲任、隨便修營、官府寂然、恆若無事、唯約束長史、所修不須過勝他縣、使百姓勞苦、然在下各自竭心、常爲諸縣之最」(同右)。

- (11) 『新唐書』卷八五竇建德傳には、孫安祖は羊を盗んで縣令に咎打たれたためこれを刺殺したとあるが、ここでは、『舊唐書』卷五四竇建德傳および『通鑑』卷一八一による。

- (12) 氣賀澤氏註(3)所掲「竇建德集團と河北」参照。

- (13) 竇建德が亡命したときには、遼東に向うべく編成されていた麾下二百人の兵を引きつれている。兵士たちはみな郷里の働き手であったであろう。かれらの亡命による生活の困難と官憲の壓迫が當然豫想される。

- (14) ただ『革命記』には、「高士達・高德政與宗族鳩集離散、得五萬人、掠渦於四根柳樹、入高雞泊中、德政自號東海公、以建德爲長史、俄而德政死、云々」とあるが、これは高士達の敗死のことであろう。

- (15) 『通鑑』卷一八一大業七年條。

- (16) 「阿舅賊」とよばれた群盜には、劉霸道のほか、平原の李孝逸がある(『隋書』卷四煬帝下)。

- (17) 隋末、豆子航に據った群盜の首領には、劉霸道のほか、格謙・孫宜雅らがあり、かれらはそれぞれ軍團を率いていたと考えられる。劉霸道の勢力十餘萬というのは、それらの混成集團の總計であったとも考えられる。ちなみに、劉霸道については、その後史書には現われない。

- (18) この点については、拙稿「隋末唐初山東叛亂勢力之研究」(黃約瑟・劉健明合編『隋唐史論集』、香港大學亞洲研究中心

心、一九九三年) 参照。

- (19) 同右論文参照。

- (20) 『類說』卷六知世郎の條に、『河洛記』を引いて、大業末の叛亂勢力について述べた中に、「又有結聚村落、百十爲羣、如黑社・白社・青特・胡驢之號、云々」とある。なお、この條については後註(24)を見よ。

- (21) 李密と翟讓のやりとりを原文で示せば、つぎの通りである。李密「明公、以英傑之才、而統驍勇之旅、宜當廓清天下、誅剪羣兇、豈可求食草間、常爲小盜而已」、翟讓「僕起隴畝之間、望不至此、必如所圖、請君先發、僕領諸軍便爲後殿、得倉之日、當別議之」(『隋書』卷七〇李密)。

- (22) このやりとりの言葉の原文はつぎの通り。李密「君能用密之策、河朔可指揮而定」、郝孝德「本緣饑荒、求活性命、何敢別圖、國家若知公在此、孝德死亡無日、翟讓等徒衆絕多、請將兵送公於彼」。

- (23) 煬帝の命を受けて李密討伐に赴いた馮慈明はかえって李密の側に捕えられたが、その際かれは翟讓の麾下に向って、つぎのように言っている。「汝等本無惡心、因飢饉逐食至此、官軍且至、早爲身計」(『隋書』卷七一誠節・馮慈明)。ここにいう惡心とは、いうまでもなく反隋の意志を指している。

- (24) 宋の曾慥の『類說』卷六、知世郎の條に、『河洛記』を引いて、つぎのように記している。「大業末、齊寇先起、鄒平人王薄擁衆據長白山、自稱知世郎、言世事可知矣、作歌以招徵役者、云、長白山頭知世郎、純著紅羅錦背褙、長稍侵天半、輪刀耀日光、上山吃獐鹿、下山吃牛羊、忽聞官軍至、提

劍向前邊、譬如遼東家、斬頭何所傷、人多附之、云々。この歌詞は『通鑑』大業七年十月の條にいう「無向遼東浪死歌」の一節に當るのであるが、長白山を根據として時に下山して剽掠を行なう王薄らの生活がよく表現されている。ちなみに、『河洛記』は『通鑑考異』にしばしば引かれ、大業九年四月の條には、『劉仁軌河洛記』とあり、同年十月の條には、『劉仁軌河洛行年記』とある。『舊唐書』卷八四劉仁軌傳によれば、『仁軌身經隋末之亂、輯其見聞、著行年記行於代』とあり、正確には、『河洛行年記』であつたことが分る。

(25) 「先是、有上谷賊帥王須拔、自號漫天王、擁衆數萬、入掠幽州、中流矢而死、其亞將魏刀兒代領其衆、自號歷山飛、入據深澤、有徒十萬、建德與之和、刀兒因弛守備、建德襲破之、又盡并其地」(『舊唐書』卷五四竇建德傳)。「通鑑」卷一八六武德元年十一月の條にも、「其將魏刀兒代領其衆、據深澤、掠冀定之間、云々」とあり、胡三省は深澤に注して、「隋志、深澤縣屬博陵郡、劉昫曰、治淶沱河北、宋白曰、以界內水澤深廣名縣、云々」と述べている。

(26) 「大業十二年」八月乙巳、賊帥趙萬海衆數十萬、自恆山寇高陽(『隋書』卷四煬帝下)。これは太行山脈から河北平原への抄略行動である。

(27) 「大業」十年、賊左孝友衆將十萬、屯於蹲狗山、須陁列八風營以逼之、復分兵扼其要害、孝友窘迫、面縛來降(『隋書』卷七〇誠節・張須陁)。蹲狗山は、蹲大山ともいい(『讀史方輿紀要』卷三六山東七)、山東省黃縣西南にあり、大沽

河の水源をなす。

(28) 「東海賊彭孝才衆數千、掠懷仁縣、轉入沂水、保五不及山」(『隋書』卷六五董純)。五不及山の所在地は不明であるが、沂水上流、山東・江蘇の省境あたりかとおもわれる。

(29) 「會彭城賊帥張大彪・宗世模等衆至數萬、保懸薄山、寇徐兗、帝令純討之」(『隋書』卷六五董純)。懸薄山の位置については知りがたいが、『通鑑』卷一八二大業十年四月の條によれば、董純は張大彪(『通鑑』は虎に作る)と昌慮で戦つて大破したという。胡注は昌慮を彭城郡蘭陵縣界に比定しており、とすれば、昌慮は彭城郡(徐州)と魯郡(兗州)の中間に位置する。懸薄山もこの附近であつたと推定される。

(30) 「是月(大業十年十一月)、賊帥王德仁擁衆數萬、保林慮山爲盜」(『隋書』卷四煬帝下)。「李密遣房彥藻・鄭頊等東出黎陽、分道招慰州縣(中略)彥藻還、至衛州、賊帥王德仁邀殺之、德仁有衆數萬、據林慮山、四出抄掠、爲數州之患」(『通鑑』卷一八一、武德元年二月條)。林慮山は太行山脈南端にある山で、古來隱棲の地として名高い。

(31) 「大業十二年二月」癸亥、東海賊盧公暹率衆萬餘、保于蒼山(『隋書』卷四煬帝下)。この蒼山は、山東省臨沂南西にある。この山上から東に洋々たる滄海を望むことができるので、蒼山の名があるという(『讀史方輿紀要』卷三三山東四)。

(32) 瓦崗(河南省滑縣)はいくらまでもなく、翟讓の根據地である。李密が滎陽郡を制壓することに成功したとき、讓は密につきのように言っている。「今資糧粗足、意欲還向瓦崗、公

若不往、唯公所適、讓從此別矣」(『通鑑』卷一八二大業十三年十月條)。結局は別れることにならなかったのだが、瓦崗は東郡韋城縣の人翟讓にとつては郷里である。

(33) 「時鄭人張金稱聚衆河曲」(『通鑑』卷一八一、大業七年十二月條)。胡注によれば、河曲とは清河の曲の意であるという。なお、『新唐書』卷八五竇建德傳には、「時鄭人張金稱亦結衆萬餘、依河渚間」とある。

(34) 「大業九年」三月、丙子、濟陰孟海公起爲盜、保據周橋、衆至數萬、見人稱引書史、輒殺之」(『通鑑』卷一八二)。周橋は、河南省曹縣東北にあつたらしく、この地もおそらく荷水流域の水郷であつたと推定される。

(35) 李勣の提案の原文は以下の如くである。「今此土地是公及勣鄉壤、人多相識、不宜自相侵掠、且宋鄭兩郡、地管御河、商旅往返、船乘不絕、就彼邀截、足以自相資助」(『舊唐書』卷六七李勣)。

(36) この民による民の掠奪という事實について、從來の研究はほとんど注意を拂っていないように思われる。漆俠氏の『隋末農民起義』(華東人民出版社、一九五四年)にはこれについて一言も觸れていないし、比較的近年の刊行にかかる李斌城主編『中國農民戰爭史隋唐五代十國卷』(人民出版社、一九八八年)も同様である。なお後者は、翟讓が部下の徐世勣の勸告によつて抄掠目標を汴河の商旅に轉じたことを記述するが、その理由である、同郷の人びとを侵掠するのは宜しくないということについては何も記していない。

(37) 『舊唐書』卷一八八孝友・李知本。

(38) 同右、張志寬。

(39) 『隋書』卷七二孝友・李德饒。

(40) 拙稿「隋代の通守について」(『周一良先生八十生日紀念論文集』中國社會科學出版社、一九九三年所收) 参照。

(41) この一句は、中華書局版標點本校勘記を参照して、譚に、宅を地に改めた。

(42) 唐は建國の初、總管制をとり、數州をまとめて總管とした。當時歸降してきた首帥に總管を與えて勢力伸張を圖ることが多く、武德二年三月には、王薄を齊州總管に、伏德を濟州總管に、鄭虔符を青州總管に、慕容順を濰州總管に、王孝師を滄州總管に、それぞれ任命している(『通鑑』卷一八七)。こうして李義滿はおそらくかつて剽掠の被害に苦しんだ王薄と、統治の境を接することになる。そのせいかどうか不明であるが、兩者は仲が悪く、義滿は齊州の獄で自殺し、義滿の兄の子武意が王薄を殺すという事件に展開した(『通鑑』卷一九〇武德五年二月條)。

(43) 李育徳の兄厚徳も唐に歸順して殷州刺史を授けられているが、その時期については、諸書の間に異同がある。

(44) 『冊府元龜』卷一六四帝王部・招懷二には、「王世充將李公逸來降、拜上柱國邑二千戶、公逸、黃人也、隋末喪亂、與其族弟善行客居雍丘、以義勇爲人所附、初歸王世充、知其必敗、遂開道遣使請降、遂有是命、因以雍丘置杞州」とある。

黃縣は山東半島の北端にあり、これによれば、そこから遠く雍丘へ客居していたわけであり、雍丘は李公逸らの郷里ではないことになる。しかし雍丘に程近い濟陰郡の屬縣の一つに

外黃があり、あるいは外黃の誤かも知れない、公逸が陽夏郡公（北魏の陽夏郡はもと杞縣の位置にあり）を授けられているのも、この疑いを濃くする。

- (45) 李公逸は王世充に歸附する以前、李密に屬していたらしい。「攝江都郡丞馮慈明」奉表江都、及致書東都論賊形勢、「使人」至雍丘、爲密將李公逸所獲」（『通鑑』卷一八四義寧元年二月）。

- (46) 剽掠から政權樹立までは、さまざまの過渡的狀態があつたと思われる。前掲『類說』卷六知世郎の條に、「後楊玄感反、山東遂成大亂、河北有張金秤（稱）、王拔須等凡二十七項、多至十餘萬、少不下萬人、屯據州縣、建營山澤、云々」とあつて、群盜は山澤に聚結したばかりでなく、州縣にも屯據していたことが分る。『隋書』卷七一誠節・楊善會傳に、「于時山東思亂、從盜如市、郡縣微弱、陷沒相繼、能抗賊者、唯善會而已」とあるように、攻陷した城邑にそのまま屯據する場合も少くなつたのではないかと推測される。しかしそれも剽掠の一形態であつて、それが直ちに政權樹立に結びつくわけではないであらうが、地域支配の契機にはなつたと想像される。ちなみに、地域支配の一例として、現山東省の一部を席卷した徐圓朗がある。「徐圓朗者、兗州人也、隋末、亡命爲羣盜、據本郡、縱兵略地、自琅邪已西、北至東平、盡有之、勝兵二萬餘人、仍附於李密、密敗、歸王世充、及洛陽平、歸國、拜兗州總管、封魯郡公」（『舊唐書』卷五五本傳）。これは政權樹立の前段階ともいうべき姿を示している。

- (47) 李密は元寶藏を魏州總管、朱粲を揚州總管に任じている（『通鑑』卷一八四、義寧元年九月條）。また、本文に擧げた李育徳の例がある。

- (48) 「於是、密之將帥・州縣多降於隋」（『通鑑』卷一八六武徳元年九月條）。

- (49) 『舊唐書』卷五四竇建徳傳によれば、建徳は大業十三年正月に長樂王を自稱し、年號を丁丑と定めた。夏國を稱するようになるのは、翌武徳元年の冬至の日である。ちなみに、大業十三年は丁丑年に當る。『通鑑』の記述もこれとほぼ一致する。

- (50) 中華書局版標點本では張敦仁『資治通鑑刊本識語』により「至」字を補なう。山名本『通鑑』には「至」字がある。

- (51) 『舊唐書』卷八三程務挺。

- (52) 『舊唐書』卷一高祖。

- (53) 新舊兩唐書の地理志は、共に武徳四年とする。

- (54) 註(42)に擧げた諸例や前述恆山の胡大恩が代州總管を授けられた例、あるいは林慮山に據つた王徳仁が相州刺史を授けられた例（『通鑑』卷一八五武徳元年五月條）など、多くの事例がある。

- (55) 例えば、唐に歸屬して陟州刺史を授けられた李育徳は、王世充支配下の「河内堡聚三十一所」を攻下している（『通鑑』卷一八七武徳二年二月癸亥條）。この「堡聚三十一所」もまた地方自衛より出發して王世充に歸したものであるとすれば、同じ性質の集團が異なる政治勢力に屬して、互いに統一戰爭を戦つたわけである。兩唐書忠義傳に載せる李公逸、族

弟善行、張善相らの人びとも、このような歴史の現實の下で、唐朝に殉じて行つたのである。

(56) この總管・刺史の交迭は、唐朝にとってはその威令を各地方に徹底させるためのものであつたであらう。しかし、その結果は中央政府と現地との間に隙間を生んだらしく、竇建德の敗滅と劉黑闥が夏國の再興を圖つて擧兵し、徐圓朗がこれに呼應して、河北・河南が再び反唐の形勢となつたのも、そのことと關係がある。「竇建德之敗也、其諸將多盜匿庫物、及居閭里、暴橫爲民患、唐官吏以法繩之、或加捶撻、建德故將皆驚懼不安、高雅賢・王小胡家在洛州、欲竊其家以逃、官吏捕之、雅賢等亡命至貝州」(『資治通鑑』卷一八九武德四年七月條)。こうした情況が生れつつあつたところに、唐朝は竇建德の舊部將范願、董康買、曹湛および右の高雅賢らを徵召しようとした。舊部將たちは殺されるのではないかと恐れ、再起を企てた。こうして劉黑闥が、彼等によって擁立されるのである。黑闥が起ち上ると、竇建德の舊支配地では、現地民が唐朝の派遣した刺史を殺して劉黑闥に呼應する動きが、陸續として現われた。試みに『通鑑』の記述より拾い上げると、左の如くである。

武德四年十月 庚寅、觀州人執刺史雷德備、以城降之(劉黑闥)。

同 毛州刺史趙元愷、性嚴急、下不堪命、丁卯、州民董燈明等作亂、殺元愷以應黑闥。

十二月、丙寅、洛州土豪翻城應黑闥。

武德五年、正月、庚寅、東鹽州治中王才藝殺刺史田華、以城

應黑闥。

同 九月、鹽州人馬君德、以城叛附黑闥。

そして、『通鑑』はこれらを總括して、次のように述べる。「是時、山東豪傑多殺長吏以應黑闥、上下相猜、人益離怨」と。つまり唐朝より派遣された刺史とその部下・州民の間に疎隔を生じていたことを指摘するが、その具體例が右の武德四年十月の毛州刺史趙元愷とその州民との關係であらう。ちなみに、河南一帯では、劉黑闥に呼應して叛した徐圓朗の許に賤返っている。「黑闥以圓朗爲大行臺元帥、兗・鄆・陳・杞・伊・洛・曹・戴等八州豪猾、皆殺其長吏以應之」(『舊唐書』卷五五徐圓朗)。以上によれば、武德初年における唐朝の河南・河北經營には大きな問題があつたと言わざるを得ない。それが何であつたか、そしてその後においてそれをどう收復して行つたかは、今後の課題としたい。

CIVIL STRIFE AND THE POPULACE IN THE LATE SUI 隋 PERIOD

—Depredation and Self-defense—

TANIGAWA Michio

Most previous studies of the civil strife that occurred in the early seventh century as a result of the tyranny of Sui Yangdi 煬帝 have focused on the power struggle between the Sui imperial house and rebels opposing this. However, Zhang Xuansu 張玄素 recorded that the number of rebels vying for political supremacy amounted to no more than a dozen or so, and that the majority of those involved in civil strife sought primarily to preserve their own interests or those of their local society. Thus, the majority of these people lacked subversive intent. This article, based on such eye-witness observations by Zhang, analyses the civil strife of the late Sui with particular reference to the vast majority of the populace who did not harbor imperial aspirations.

The commoners who abandoned their towns and villages and fled to the mountains and marshes formed robber bands which proceed to both seize the property of local government administrations and to pillage neighbouring village settlements. Despite a certain amount of sympathy that may have existed for people driven to such lengths by starvation, in most cases the depredations of these bands do not appear to have been regarded as justifiable peasant uprisings. For their part, the victims of these raids organized for self-defense around local prominent families. In the latter half of the period of civil strife, the local warlords who had acted as commanders of villages that were fortified for self-defense were appointed to the posts of commander-in-chief (zongguan 總管) or prefect (cishi 刺史). This facilitated the reconstruction of the commandery and county (zhou-xian 州縣) system. The foundation of the era of peace which developed fully under Tang 唐 unification can be traced to such efforts to maintain order via local self-defense.